

植民の終極目的

(大正二年十二月法學協會雜誌第三十一卷第十二號)

個人は自己の欲する方面に移住せんとし、移民會社は適當の地方を探求して其事業の經營に努め、國家は各領土の擴張を計りて自國民族の發展に汲々たり。然るに凡そ人類萬般の事業中拓地植民の如く其終極目的の不明なるものなかるべく、又經營の難きものもあらざらん。是故に個人にせよ、團體にせよ、將又國家にせよ、此事業に於て成功の月桂冠を戴けるもの甚少く、纔に成功せる者も爲めに莫大の犠牲を拂はざるはなし。熟ら過去植民の事蹟に鑑みるに、個人或は國家が果して此目的を達し得べきや大に疑懼の念なき能はざるなり。クローマー卿 (The Earl of Cromer) 云はずや「かの帝國主義なるものは果して能く之を實現し得るや否や予之を知らず。世上之を唱道する輩も亦恐らくは然らん」と。又ブリックナー (Brückner) 教授も言を爲して曰く「植民事業は人力の如何ともする能はざる自然力の支配を受くるものなり」と。

抑地球の運行に因りて週期的に氣候の變調を來し、早魃と濕潤とは殆ど時を定めて循環し來る。例へば本年東半球雨量多ければ西半球は極めて少く、明年西半球濕潤なれば東半球早魃なるが如し。而

して氣候の早濕によりて作況の著しく影響せらるるは言を俟たず。東半球凶作に苦しむの時西半球は豊作を喜ぶの現象を生ず。その結果後者に勞働の需要大に起り、商工業従つて殷盛を致さば、東半球より西半球に向て幾萬を算する移民の滔々として流れ來るは猶水の低きに就くが如くなり。反之西半球に凶年打續かば東半球の故郷に歸去する者踵を接せん。其顯著なる例は近く一八四七年の英吉利に於ける馬鈴薯凶作に之を見るべし。此年迄は英王國より米國へ移住せる者年々八九萬を超えざりしが、此年氣候不順の爲め凶作なるや俄に約二十六萬の黎民は故國を去り、爾後國を去る者年々殆ど同數に達す。又古き例を徵すれば匈奴が鐵蹄遠く亞細亞大陸を横斷して歐洲を侵襲蹂躪せるも中央亞細亞の飢饉實に之が因をなせることは、近來該地方の老樹古木を倒伐して其年輪を研究し其事實たる確證を得て疑を容るる餘地なしといふ。

是を以て之を觀るに氣候の變化は國家社會個人の計畫よりも遙に偉大な力を以て世界各國の植民を促がすに非ざるか。人自ら轉住の自由ありと信するも爰んぞ知らん之を支配するの力は他に存せんとは。而して實に如此偉大なる力あればこそ世界は今後人類を以て充ち満ち、天涯地角苟も人類の住居せざる處なきに至るなれ。若し夫れ此力微かりせば誰か好んで住慣れたる郷貫を辭して遠く異境に漂寓する者あらん。若し又移住なる事なければ人類は狹隘なる面積中に蠢々として簇居し、互に相反噬するが如き劇烈なる競争絶ゆる時なく、爲めに却て其進歩を阻碍するに至るべし。試に思へ現今地

球上人類の用に供せらるる土地は全面積の幾分なるかを。吾人は其甚だ狭少なるに驚かずんばならず。往昔希臘人は人類の力の及ぶ範圍を *Oikumene* と稱したり。即「苟くも人類の住居に適する世界」(Habitable World) の謂なるが、其狭少なるは左表に示す所の如し。(Bessel の調査)

地球の全面積

五〇九、九五〇、七七八方基米

此の内陸地二八・四%即ち

一四四、四三二、〇五〇

陸地の内可耕地面積

一一〇、〇〇〇、〇〇〇

可耕地の内耕種適地面積

七三、〇〇〇、〇〇〇

尙ほ左に陸地の分配及び各大陸に現住する人口の大約數を示さん。(面積總數はベッセル氏の調査と異なり。)

面積	人口	一方基米に對する人口	
歐羅巴 <small>方基米</small>	九、八九八、〇〇〇	四四七、三〇〇、〇〇〇	四〇人
亞細亞	四四、一九三、〇〇〇	九〇九、〇〇〇、〇〇〇	二〇
亞非利加	三〇、七八二、〇〇〇	一四〇、〇〇〇、〇〇〇	四
亞米利加	三九、〇二〇、〇〇〇	一七七、〇〇〇、〇〇〇	四
澳洲	八、九六〇、〇〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇	一
南北極	一二、六七〇、〇〇〇	一四、〇〇〇	!

合計	海洋	合計
一四五、五三四、〇〇〇	三六四、四二六、〇〇〇	一、六八九、〇〇〇、〇〇〇
		一一

全面積に對する一方基米の人口密度は十一人餘にして、可耕地面積に對しては十四人なり。

この狭少なる土地に對して現今の世界の人口、又今後増殖すべき豫測數の甚だ大なるを想はば豈寒心せざるを得んや。若し全可耕地域の人口密度をして日本と同率(即一二二)ならしめば世界の人口は百三十四億二千萬即ち現今人口の八倍となるべし。又今人口増加率を百年間に二倍するものと假定すれば今後一千年間の人口増加は左の如くなるべし。

年	人口(單位百萬)		一方基米に對する人口	
	歐洲	全世界	歐洲	全世界
一九〇〇	四〇〇	一、六〇〇	六七	一五
二〇〇〇	八〇〇	三、二〇〇	一三四	三〇
二一〇〇	一、六〇〇	六、四〇〇	二六八	六〇
二二〇〇	三、二〇〇	一二、八〇〇	五三六	一二〇
二三〇〇	六、四〇〇	二五、六〇〇	一、〇七二	二四〇
二四〇〇	一二、八〇〇	五一、二〇〇	二、一四四	四八〇
二六〇〇	五一、二〇〇	二〇四、八〇〇	八、五七六	一、九二〇
二九〇〇	四〇九、六〇〇	一、六三八、四〇〇	六八、六〇八	一五、三六〇
植民の終極目的				三八五

即ち一千年後の稠密程度は今日の千倍即每方基米一萬五千人に達す。而して現時此密度を有する地域は唯倫敦市あるのみ。全世界が倫敦と等しき人口率に達せんとは甚だ想像し難きも且らく數字上の傾向を示さんのみ。

然れども各國の人口密度を考ふれば今後世界の人口が二倍三倍となるも過多の憂なからん。我國に於ける人口稠密の程度を以て推論すれば、將來南米及亞弗利加兩大陸の支へ得べき人口の數は殆ど無限と稱するも可ならん。然るに生民をして其故郷より未開の異境に向はしむるものは恐くは人類の抗拒し得ざる力の存するに因りて初めて起るが如し。思ふに全地球は畑地にして之に人種子を蒔くものは人類以外の一種の力なり。聖書には「天父は農夫なり」と言へり。されば多人少地の地より多地少人の地に人種子を植うるは、將來全人類の最高政策ならん。ルーカス(Lucas)氏の近著 Greater Rome and Greater Britain に科學の使命を説いて曰く、「科學の至重至大の事業は人類の住居に適する地をして更に一層多數の人類を容るるを得せしめ、又人類の住居に適せざる地を適するが如く爲すにあり」と。至言なりと云ふべし。

斯くの如くにして初めて地球と生民との關係を密着ならしめ、人力を以て地球を征服すといふことを得。征服なる語は甚不穩當なる如くなれども、畢竟天地人の合體にして、自然と人との間に絶對的關係を生じ、己と物と無二の妙境を得、即ち地球を人化するの意に外ならず。コムト(Comte)は

Biocnacy と稱して生命ある者即有機體が一大同盟を結んで無機體を征服するを以て進化の究竟目的なりと論じたり。又近來イブセン(Sigurd Ibsen)氏は人の人たる所以のもの(Human Quintessence)は確固たる意識を以て自然を征服統禦するに存すと論じたり。是れ實にセイリェル(Sellière)氏の倫理的帝國主義と稱せるものにして、古の聖賢が倫理を以て物理を制せんと教へ、又至誠を以て物之性を盡し則ち以て天地の化育を贊げん(中庸二十二章)と説きたると同じ。斯の如き目的を遂行せん爲この一手段として生民を邊疆に移植すると同時に、各種の動物生存の範圍(Biosphere, Lebensraum)をも擴張すべし。斯く考へ來れば植民の終極目的は實に人類の最高目的と一致すべく、プラットー(Laws, Book IV)の「法律と植民程、人の徳性を發揮完美せしむるものなし」との言は眞に過言に非るを知る。

前項に於て植民の理想的終極的目的を説明したるが未だ盡さざる所あるが故に尙ほ一言を加へん。先には人類が能動的に地球を人化するべきを論じたりしが今一步を進めて人類が受動的に森羅萬象の感化を受くべきことを説かん。抑天地の人に及ばず作用未だ全からず。之を全からしめんには Oikumenos の擴張をして常に人類生存の境遇を空間的に廣からしむるのみに止めずして、宜しく生民をして集約的に自然力の感化に浴せしめざるべからず。然らば則ち他日人跡未到の土地開け、耳未だ聞かざるの聲聞え、目未だ見ざりし色も見えて、心身共に新しき力を覺ゆるならん。法華經法師功德品に善

男善女の五感が將來達すべき理想の程度とも稱して可なるものを示して曰く「人ハ當ニ八百ノ眼ノ功德、千二百ノ耳ノ功德、八百ノ鼻ノ功德、千二百ノ舌ノ功德、八百ノ身ノ功德、千二百ノ意ノ功德ヲ得ベシ云々」と。余法華經を讀む毎に心必らず此の品に留り六根清淨の果報の偉大なるを知ると共に現在の狹隘なる境遇にありて此理想に達するは不可能なるを憂へざることなし。吾人の Okimene をして三千大世界を網羅せざる限りはいかにか須彌山を見、命々の音聲を聞き波利質多羅拘鞞陀羅樹の香をかくことを得んや。既にダーウ・キン (Darwin) も進化の一條件として趨異性を説き其接觸する境遇愈廣ければ進化の餘地も亦愈多しと唱へたり。假令全然彼の説を信せざるも境遇の人類進化に及ばず影響の甚深大なるは種々の點より明瞭なるところなり。

人類が外的境遇に應じて變化すること僅々數百年否數十年以内にも著しく現はるることあり。英人は米國に移りて後其氣質が如何に平民的に變化せるか、又同じ「アングロ・サクソン」人が濠洲に入りて如何に社會主義的に傾けるかは吾人の目撃せる所なり。ボアス (Boas) 博士の綿密なる研究に據れば歐洲各國より米國に移住する者は二代にして頭形に變化を來し廣頭形より長頭形に變ずと云ふ。人類界に於て自然淘汰の忌憚なく行はるる所は植民地なりとす。通常新開地を失敗家の趨く處蹉跎者の逃場所となし劣等人種の群居聚落と信する者あれども事實は大に之に反す。何となれば一般社會に於て單に弱者たるが故に失敗せる者は一敗地に塗れては復起つ能はず新開地に赴く氣力等元よりな

く、奮て植民地に進む者は假令失敗者にせよ元氣猶ほ旺盛なる者に限ればなり。彼等の赴く先きは生存競争の潮流極めて急激にして弱者を容るる餘地なく舊社會に於ては中位に位せる者も新開地に至れば激烈なる競争に耐ふる能はずして半途に斃れざる者稀なり。濠洲或は米國に「アングロ・サクソン」人が思ふ存分發展するは之が爲なり。特に米國史を見るに勢力は漸次西方へ向つて進み邊疆生活が米國全土に甚深なる影響を及ぼす所以も亦之が爲なり。(Paxson, The Last American Frontier; Finley, The French in the Heart of America) ヲネグソン (Bergson) 氏は人の爲すことは單に自然淘汰にのみ依らずして生フィナなるものの中に一種微妙なる作用ありて其の境遇と感應し境遇異なるに隨つて變化す、學術上未だ其性質を説明し得ざれども外より呼べば内より應ふる特種の力ありと論ぜり。果して彼の言の如くんば Okimene を益大ならしむるは人類將來の發達に資するに與つて力あるべし。而して如何に不毛の地を開くも之に一旦生民が移來れば其増加の速かなるが爲に忽にして少地多人の憂を反覆する恐あるは論を俟たざるなり。然るに聊か憂慮を輕からしむるは人口の増加或程度に達すれば自ら抑制せらるることなり。現今出生率は殆ど文明の程度と反比例する傾向見ゆ。假に年々人口の減少一分なりとせば數千年ならずして世界は無人の域に復すべく、又世界の人口にして毎年一プロセントの百分の一づつの割合を以て退滅せんには次の如き結果となりて、今後一萬五千年を経れば全世界の人口は一部落にも足らざるに至るべし。

年	人	年	人
二、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇	一、一〇三、〇〇〇、〇〇〇
四、〇〇〇	四〇六、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇	一五〇、〇〇〇、〇〇〇
六、〇〇〇	五四、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇	一九、四〇〇、〇〇〇
八、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	九、〇〇〇	二、五〇〇、〇〇〇
一〇、〇〇〇	九〇〇、〇〇〇	一一、〇〇〇	三二四、〇〇〇
一二、〇〇〇	一一六、〇〇〇	一三、〇〇〇	四二、〇〇〇
一四、〇〇〇	三、八〇〇	一五、〇〇〇	一、三七〇

而して如此凶事も事情によりて起らざるを保證し難きも、人自ら己を制する力あり又未來を慮るの智ある以上は人口の増加を適度に制するを得べし。之と同時に人の品質を改良する方法も講せられ已に一方には Eugenic 若くは Puericulture の着手せらるるを以て見れば人類の將來は決して憂ふべきに非ずして益其發展を期すべきものならん。尙は假に全 Oikumenē を人類を以て充たすものとすれば恐らく其頃には化學的作用を以て食料 (Aminoidea) を供給する途も開かれ或は空中より食を仰ぐこと恰も今日空中より肥料を得るが如きものならん。更に想像を逞うすれば此惑星以外に居を求むるの時も來らんか。秦の始皇帝が不老不死の藥を蓬萊山に求めたるは漢人が日本に移住せる嚆矢に非ずや。西班牙人が或は黄金を慕ひ或は不老不死の泉を尋ねて南米に遠征せると人情に於ては古今東西異

なるなし。唯其求むる所が漸次合理的學術的となり、其範圍も亦大に延長して將に他の惑星へ迄も飛行するの計畫すら想像さるるなり。佛のコンドルセ (Condorcet) 獨のシュレーゲル (Schlegel) は何れも人性の「無限の完全」(Endless perfectibility) を説きしが、人にして果して完全となり、神通力を得且つ神たるの能力を有するに至るとせば、之を實現せしむる一着としてかの境遇を大ならしめ自ら天地間の現象に接觸し、以てベルグソンの所謂内力の外力に應ずる途を開くを要す。荀子曰く「君子居必擇郷」と。郷を擇む者豈君子のみならんや。衆生も亦然り。是れ予の植民の理想的終極目的として人類の境遇擴張を説く所以なり。

植民の目的を論ずる者一般に過剰人口を國外に移して以て彼等を救済すると共に遺留同胞の救済をも併せ圖るを以て最大目的の如く唱道するを常とす。此理甚だ視易く且歴史上の事實に徴するも然るが如し。我邦に於て一村落の人口増殖すれば出郷を設けたるが如き、又希臘の都市に於ても人口過剰なるを感ずれば協議の上青年の一部が移住團を組織して新開地に轉住したる如き、其實例に乏からず。又獨逸のファブリ (Fabri) 氏が初めて同國の海外發展を論ずるに際しても亦此點に最も重きを置きたり。今日に於ても獨逸の海軍擴張論者は聯邦の毎年七十萬の人口増殖を指して植民の急務を説き、露國の極東發展を論ずる者も亦同國に於ける毎年百五十萬の出生過剰を擧ぐ。而して吾人が植民とさへ云へば必ず年々六十萬を算する過剰同胞の處分を呼ばざるなし。然るに實際上如何なる程度に迄此目

的が遂行さるるや、又理論に於ても果して誤謬なきや疑なきを得ざるなり。移民事業が一部落、一都會の一次的救済として効果あるは勿論なりと雖も、一國の見地より論ずれば其效果假に之ありとするも甚だ短期的一次的の姑息策たるに過ぎざるなきか。而かも此一次的効果すら多數の移住者あるに非れば決して十分なる事能はず、且又假に數多の移民一時に本國を去るとするも遺留者が果して結婚出産を慎むや否や甚だ覺束なく、恐らく過剰人口移住の結果殘留者は多少の餘裕を生じて結婚を急ぎ子を擧げ、幾許もなくして再び人口の過剰を訴ふるに至らん。即ち古典經濟學に所謂賃銀鐵則 (Iron Law of Wages) の適用を見ざるを得ざるべし。其理未だ確實ならざれども一國人口の自然的増殖は移住者と新來住者との數と常に關聯せるやの感あり。即ち去る者多ければ一次的の人口減少に次ぎて直に出生増加すべく、反之外より來住する者多ければ内國居住者間に出生の減少することは著しき社會的現象なり。之を名付けてウォーカー氏の移民増減法 (Walker's Law of Immigration) とす。(E. A. Goldenweiser, Walker's Theory of Immigration; American Journal of Sociology, Nov. 1912, Vol. XVIII, p. 342; Walker, Immigration and Degradation, Discussions in Economics and Statistics, Vol. II, p. 422; H. P. Fairchild, The Paradox of Immigration, American Journal of Sociology, Vol. XVIII, p. 263.) 故に理論上より推究するも人口過剰の弊害救済策としては植民は頼むに足らざるものと信ず。又今日各國の實際を見るに植民地を有する諸國の人民は必しも自國の植民地に移住するものに非ず。歐洲列國中移民の最も多きは伊太利なる

が、彼等の向ふ所は其自國植民地には非ずして彼等の四分の三は米國に移住す。茲に伊國民の海外發展の一斑を窺はん爲め一九〇八年に於ける同國移民の諸國散布の状態を擧ぐれば左表の如し。

亞爾然丁	一、五〇〇、〇〇〇	伯刺西爾	一、二〇〇、〇〇〇
北米合衆國	一、五〇〇、〇〇〇	ウルガイ	一〇〇、〇〇〇
アルゼリヤ	四三、〇〇〇	チユーニス	八〇、〇〇〇
埃及	四〇、〇〇〇	佛蘭西	三〇〇、〇〇〇
瑞西	一〇〇、〇〇〇	獨逸	一〇〇、〇〇〇
其他諸國	一〇〇、〇〇〇		

然るに自國の植民地への移民は左表の如く僅に二千餘に過ぎず。

トリボリス	七〇四
エリトリア	一、六七四

和蘭、西班牙、葡萄牙、獨逸、佛蘭西に於ても皆同一轍なり。

加之移民を最多く供給する處は人口稠密なる地方に非ずして却て人口稀薄なる田舎を多しとす。伊國の例を擧ぐれば左の如し。

州名	一方哩の人口	人口十萬に付毎年の移民
アブツツナ (Aburuzzi)	一一三三	二、〇〇〇—三、〇〇〇
植民の終極目的		三九三

ベシッカタ (Basilicata)
 カルブリア (Calabria)

一一三
 二、五〇〇
 二四五
 二、五〇〇

如此北方の人口最稠密なる處は移民少し。普魯西に於ても移民は東北の人口稀薄なる地方より最多く出で、佛國に於ても亦然りとす。又近來匈牙利の移民は著しく増加したるが、其供給地方は同じく東北の人煙稀なる片田舎なり。故に余問はんとす、過剰人口處分法として植民果して何の效ありやと。

Quo Vadis? 故郷を去る者何處に行くか。先に述べたるが如く歐洲の移民にして自國の植民地に赴くものは少く、將來と雖も亦他國の領土を擇むべし。抑他國の領土を擇む理由果して何れに存するや。勿論自國植民地なるが故に行かざるに非ず、唯利の存する處ならば其何國に屬するかは問ふ所にあらざるのみ。現今諸國民の米國に行くは彼國の風土、政體、經濟事情等最能く具備整頓して移民を利する事大なるに因るに外ならず。若し夫れ自國の植民地にして之に匹敵する利益を提供せんには忽ち移民は之に向て流れん。苟も本國よりも生計豊なる地方ならば何處なりとも行かんこと水の低きに就くが如きものなり。見よ露國の農民が西比利亞に轉住せること一八八七より一八九五に至る九ヶ年間、一年平均五萬二千に過ぎざりしも、爾來一躍廿萬を超ゆるに至れるを。是れ同政府が種々の便宜を與へて米國にて享くる利益と大差なき様勉めしが故なり。然るに露國政府は依然として國內の猶太人を虐

待するを以て彼等は寧ろ米國へ向て移住し、其數近年益増加して一年十萬を超ゆるの盛況を呈す。由是觀之、過剰人口の吐き場として植民地を所有するは國家の爲め賀すべきや否やは、常に其有無に由てのみ決すべきに非ずして植民地經營政策の如何に因る。

既に過剰と云へば不必要の意を含み更に進んで有害の意義をも有すれども、過剰人口を依然本國に留めば有害なるや否や、出生の死亡超過數は果して過剰なりや否や、之を決する標準如何。要するに過剰とは國內の富源に對する語なれば富源にして増殖せば現在の人口は却て不足を告ぐべく、人口の過剰は畢竟富源の不足てふ事實の裏面を指すに外ならず。獨逸は嘗て第十九世紀間に七、八百萬の移民を出し、同世紀末には人口一萬に付海外移住者の數四十人以上の驚くべき割合を示せり。然るに現世紀に至りて此數は僅に四人に減せり。これ同國の人口減少したるに因るか。否らす。出生率は稍減じたるも總人口は年々七十餘萬の増加を爲しつつあるに非ずや。今日獨逸は人口の過剰を憂ふるよりは外國労働者を招致する必要に迫り居れり。是れ國內の富源開け總ての方面に勞力の需要起りしに起因す。反之愛蘭は出生率甚少きにも拘らず、海外移民の割合は一萬人に付き實に百七十人の多きに達し萬國其比を見ず。しかも遺留者は之が爲に大に餘澤を被る事なきは全く國內に産業起らず人民疲弊の極に達せるが故なり。此の如きは國家の病的現象と云はざるべからず。

人口一千に對する比例

植民の終極目的

三九六

國名	海外移住			出生の死亡超過		
	一九〇〇年	一九〇一年	一九〇二年	一九〇〇年	一九〇一年	一九〇二年
伊太利	五・三一	八・八七	九・〇〇	八・八三	九・二三	一〇・五二
奧太利	二・三九	二・四六	三・五三	三・八一	一一・二五	一二・七一
匈牙利	二・八二	三・六八	四・二三	六・〇六	一二・四一	一二・三九
獨逸	〇・四〇	〇・三九	〇・五四	〇・六一	一三・五六	一五・〇九
英吉利	三・一八	三・四二	四・一六	五・三二	一〇・五二	一一・六二
蘇格蘭	四・六一	四・六六	五・八〇	八・〇四	一一・〇六	一一・六一
愛蘭	一〇・二八	八・七五	九・五三	一〇・三二	三一・一〇	四・二二
						五・四六
						五・五四

人口の過剰は富源に對照する辭たるは既に述べたる如しと雖も、人其物に就きて論ずる時は固より不必要若くは有害（犯罪者を除く外）と稱すべきものなし。黎民は諸侯の寶なりとは今尙眞なり。今姑く精神的に論ずるを止め單に一の物質或は機械と見做すも民草は悉く國の寶ならざるはなく、相當の價値を有せざるものなし。其價値を動物同様生産費を以て計るに、動物以上に位するは宜なりと云ふべし。生計費の比較的高價なる米國の最下等の勞働者の經驗に據れば、兒童が五歳に達する迄は養育費一ヶ年八弗（十六圓）を要し、五歳以上になれば幾分か母の手傳を爲して多少其出費を償ふが故に、出生兒に八十圓の保險を掛ければたとひ死亡するも損失なしと云ひ、又英國勞働者の經驗に據れば

一ヶ年に十四圓を要すと云ふ。(Independent, Feb. 20, 1913.) 又近時伊太利にては男一匹の養育費は千リール（凡四百圓）を算すと云ふ。我國にては所謂里子に預ければ年三十圓乃至五十圓を要す。而して小兒が能く生長して一人並の勞働者となれば養育費不相應の生産力を有するに至るを常とす。希臘の奴隸價格は勞働者五百六十圓、農夫千圓以上と評價せられ、又羅馬の奴隸價格は凱旋の際はその供給多ければ下落すと雖も、平時は普通農民六百五十圓、工匠は千五百圓牧夫は五百圓以上と評價せられたり。又前世紀の半頃西印度に於る奴隸解放の際、奴隸一人に對する賠償額は平均二百五十圓、最高仍ほ六百圓を上らざりき。又和蘭領西印度植民地に於て奴隸解放の時には一人三百廿圓なりしが、伯刺西爾に於て一八八九年奴隸解放の折支拂ひたる代償は一人八百乃至千圓なりき。

相當の費用を投じて養育せる民草を外國へ移住せしむるは單に經濟上より見るも甚だ惜しき感あり。バステイエ (Bastien) 氏嘗ていへるあり『十萬の勞働者を他國へ送るは恰も十萬の武装せる軍隊を敵國に與ふるに同じ』と。然らば近來諸國に流行する移民防止策は非理なりやといふに、余は外國人排斥はこれ自然の人情に出づと信す。

今日の社會組織は國家を以て最完全なる團體なりとす。故に凡ての事國家の見地より判斷せらるるは又理の然るべき所なり。その著しき例は關稅制度なりとす。自國の産業未だ他國に比して基礎強固ならざるに當りては、自由貿易を行はば競争に耐へざるが故に高率なる關稅を課して外國品を排斥す。

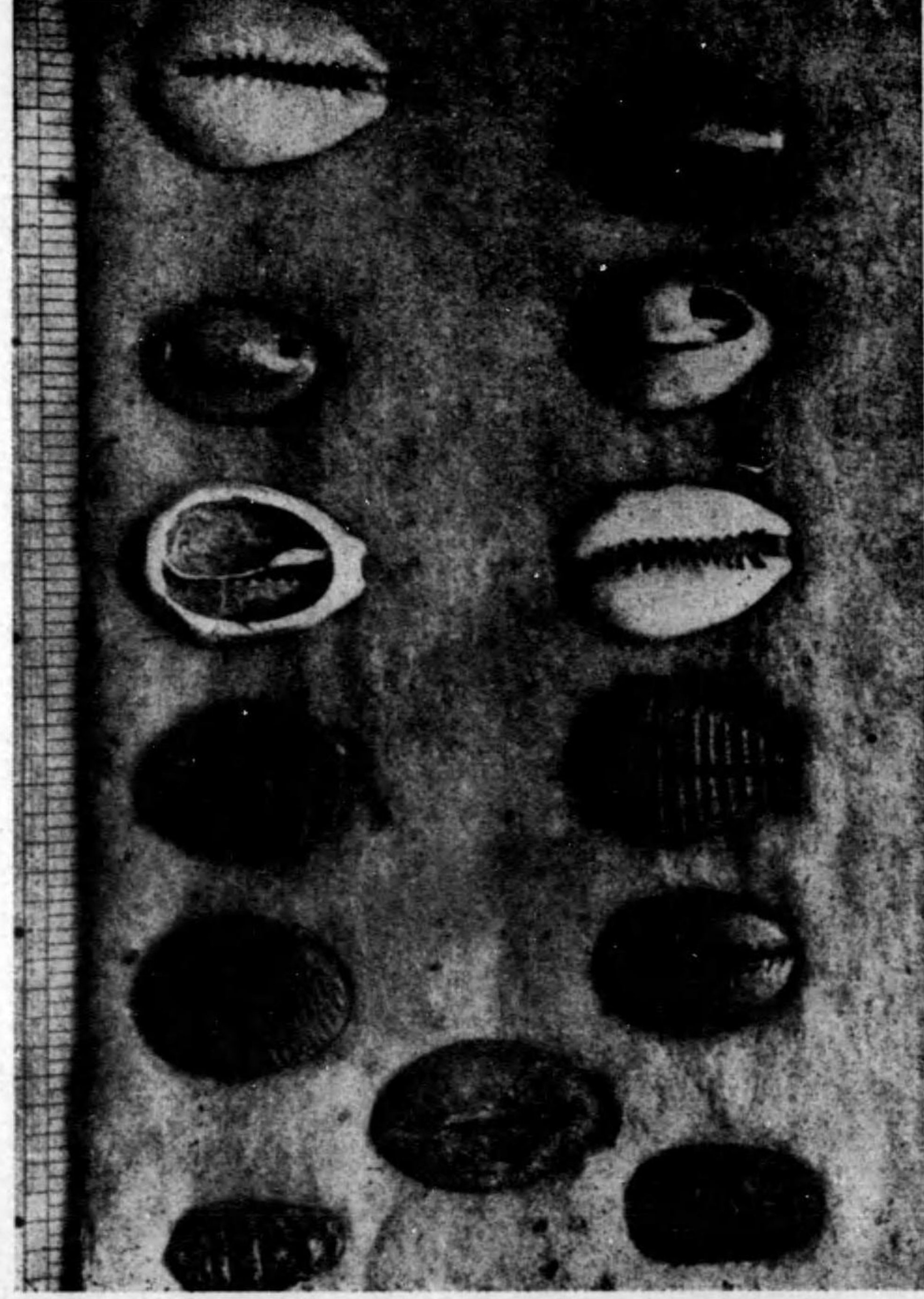
外國人を排斥するも理に於て正に同じく自國民が經濟單位として他國民に劣ると思へばこそここに外國人排斥を爲すなれ。論者或は予の用ひたる「劣る」なる文字につき異議を挟む者あるべしと雖予は經濟單位として見たる優劣を意味するものにして即ち最低の生活費を以て效力最多き勞力を供給するものを優等なりといふに外ならず。此意味に於ては支那人最優等にして隨て彼等はあらゆる國より排斥せらるるなり。而して此の如き排斥が永遠に繼續され得べきものなりや否やの問題は今日國家と稱する政治的團體が德義をも經濟をも無視して果して永く其勢力を保ち得るや否やの前提決して後に定まるべし。殊に今日の國家主義と稱するものは百年以來世界を風靡する思想にして此思想に背かば國家の存在を危うし隨て個人の生命財産の安全も失はれん。國家あればこそ個人もあれども、此國家其ものが人倫と經濟の上に立つ以上は人道も社會の經濟も無視する國家が永久存続し得とは思惟し難し。國家にして永久ならんとするには人情德義經濟即ち國家より一層廣き世界及び國家の分子たる個人に最重きを置かざるべからず。既に米國に於ては一には國庫の收入を増す爲め一には幼稚なる工業を保護せんが爲め高き關稅を課して以て國民の生活費を高め國民をして生計困難に陥らしめしに對し諸所に不滿不平の聲を聞く。之と等しく現今外國人排斥を行ふ國に於ても遠からずその政策の人倫と經濟に逆ふことを觀破し、自國民のみにては到底自國富源の開發を全うする事能はざるを悟るべし。殊に新開地に於て然りとす。濠洲に於ては勞働者は法外に高き賃銀を貪りながら尙忠實に勞働せず、

唯放肆跋扈を極め外國勞働者を排斥す。爲めに濠洲の進歩が後るる事何百年ぞや。然りと雖も翻つて彼等の立場よりいはば人情甚無理ならぬ點なきにあらず。言語風俗思想の異なる外國人の混入したる爲め假令經濟的には有利なりとも思想上風紀上有害なりとせば排斥も理りなり。一面人道に戻るが如きも又他面頗る人情に副ふ所あり。米國に於ける外國人排斥の如きも近來始まることには非ずして建國以前より各州に行はれたる政策なり。マサチューセッツ州は移住の當初より數十年を経過せざるに既に同宗派の者に非れば入國を許さざるの法律を制定せり。紐育州の如きも人口餘りに稀薄なるが爲めに歐洲大陸に廣告して移民を募りしが、獨逸人五百人到着するや豫想外に多きの故を以て其後數年間獨逸人の入國を禁止したり。ペンシルヴェニア州然り。殆ど各州比比皆然らざるはなく、自國に不利なりと思へば他を排斥するに毫も躊躇する所なかりき。甚しきに至つては州と州との間にも排斥行はれ八十年前迄は各州城壁を築いて出入を自由ならしめざりき。今日より之を見れば笑ふに耐へたるものなるも當時の思想を考ふれば又怪しむに足らず。我國に於て封建時代に各所に關所ありしも時代の要求に出でたるものにて濫に今日の廣き思想を以て律すべきにあらず。米國の排他主義は各州間に於ては既に其跡を絶ちしも更に之を海外の國に對して施行するに至れり。此排斥は永久なるべきかといふに恐らく各州間のそれと同じく數十年を経ずして中止せられ、何れの國籍に屬するも何れの宗教を信するも如何なる風俗に従ふも、社會の生存と進歩とに貢獻する能力あるものならば之を歓迎する

の時期到来すべきを信ず。換言すれば今日の排斥は一には人種的偏見に基き一には國籍に因るものなれども、既に人種の異なるによりて自ら經濟的能力を異にし、一民族は手工に巧なれば他民族は音樂に長じ、甲民族が繪畫の才能を有すれば乙民族は田の耕耘を能くするが如し。この天賦の民族的能力の異なるにより相互に尊重し相互に交りて富源開發を計るに至る。スーバン (Sudan) 氏が植民地を類別して、一、土人の勞力によりて經營するもの、二、移民の力によりて經營するもの、三、土人と移民と共力するに非れば經營し難きものとなしたれども、世界何れの地として第三種の植民地ならざるなからん。何國にても天賦の才能を異にするものが協力するに非ざれば十分の發展は望むべからず。頃者歴史の大家ペトリー (Prinders Petrie) 氏が數多の文明大系の壽命は平均千六百年なりと計算し且何故にかく年限を定めたるかを説明して、異種族が初めて交りてより一國を通して融合するに七八百年を要し、而して融合後六七百年を経ば衰ふるなりとの大膽なる説を公にしたるが大に玩味すべき説にして、何人も古今五千歳國民興亡の跡を見ん者は自國民のみを以て文明に達せんとせば却て國家の自滅を急ぐものなるを了解すべし。米國が今日の偉大をなしたる所以は前述せる如く小規模の排斥を爲せしにも拘らず年々百萬餘の移民を迎へ、五十餘國の國民が其長する所に從つて發展し競争し混合したる賜たり。若し今後排斥を續行せば彼國三百年を出でざるに類廢の徵を現はすべしと思ふ。

一見妄説たるに似たれども予は遠からざる將來に於てヘンリー・ヂョージ (Henry George) 氏の

説を一層廣く應用したる學説の發生すべきを信じ又其發生を希望する者なり。同氏は土地の私有制度を廢して悉く國有となすべし (Nationalisation of Land) と主張せる事は一の學説として世人の熟知する所なり。而して來るべきヘンリー・ヂョージ氏は世界土地共有論 (Internationalisation of Land) を主張すべし。抑土地は天與の賜にして國籍の區別を問はず人種の差別を論せず人類の爲めに最もよく利用する者に歸す。(尤もかくいひたればとて國家の領土權を排するの要なし。) 廣漠なる原野を有しながら之を利用せずして徒に雜草の生茂るに委するは獨り天の意に背くのみならず又人類一般に對する罪科なりとの議論の行はるる日必ず來るべし。我國徳川氏の終りに諸外國開國を求むるや同一論法を以てし、世界の一部にありながら他の部分と交を絶つは天も人も容さざる所なりと論じたり。之を要するに植民最終の目的即地球の人化と人類の最高發展とを實現するには少くとも土地に就きては世界社會主義の實現を要すべし。此の如くにして土地一度開放せられれば朔風荒れ氷雪埋むるシベリヤの荒野にも、炎熱焦し獅子吼ゆるアフリカの大陸にも、赤道直下椰子の樹茂る南洋の島々にも將又足跡未だ印せず斧鉞未だ入りしことなき南米の大森林が太古乍らに蒼鬱たる處にもこれを拓きこれを耕すに最適したる者移住土着して植民の目的を遂ぐべきなり。即ち土地を最もよく利用する者、或る意味に於ては土地を最も深く愛する者こそ土地の主となるべけれ。白樂天吟じて曰く「勝地本來無定主、大都山屬愛山人」と。



- | | | |
|-----|-----------------|-----------|
| 第一區 | 土 貝 子 殘 貝 骨 | 不 貝 同 土 面 |
| 第二區 | 土 貝 一 片 貝 | 不 貝 二 片 貝 |
| 第三區 | 土 貝 背 之 附 之 貝 | 不 貝 同 土 |
| 第四區 | 土 貝 磨 磨 一 片 骨 貝 | 不 貝 同 土 |
| 第五區 | 土 貝 磨 磨 二 片 骨 貝 | 不 貝 同 土 |
| 第六區 | 青 輪 磨 貝 | |
| 第七區 | 土 貝 磨 磨 殼 貝 | 不 貝 同 土 面 |

と云ふ名稱其ままを用ふ。一體此字は税なる意味であるさうだが、近海に澤山産するに拘らず馬來諸島では大陸の如く通貨に用ひる事が少ない。(M. B. Denny's, Descriptive Dictionary of British Malaya, Art. Cowry)

支那では寶貝を齒貝、海肥などと稱し、醫書は紙研介とも云うて、貨幣用に供した事は人の能く知る處であるが、何時頃何所で何程廣く使用したるものなるか、又使用を廢するに至つたは何故なるか、其使用の影響は如何なりしか等の問題は頗る興味あるものであると思ふ。

古代支那に於て貝が交易の媒介として如何に流通したかは、貝なる象形文字を考へ進んで此字が如何に經濟に關係ある文字の一部を構成するかを見れば明らかである。高田忠周氏編纂の朝陽閣字鑒(第一函篆部卷二十三)によれば貝の字の古形は



の類である。三才圖會にも「貝の字形に象る其中二點は其齒刻に象る其下二點は其垂尾に象る也」とある。而して此字が要素と成つて種々の經濟思想を現はす文字が構成されたのである。例へば寶、

賣、買、資、貢、貨、賽、貧、貧、賈、販、貯、賤、賃、財、贈、賄、賂、賂、賂等でも解る。貝を富の義なりと承知して見れば一目にして意味の明らかな字の二三の例を掲ぐれば穀物を藏むる賈の如き、布帛を散じて三軍を賑はす賈の如き、貨物を積む賈の如き、就中貧の字の如きは深く考へた字である。

支那に於て何時の頃より貝が用ひられ又何時の頃より廢せられたかは判然せぬ。説文によれば秦の時代に錢を以て貝に代へたとあるけれども、是が單に法規上廢せられたものか將又事實上流通場裏より驅逐されたものか不明である。又錢の流通區域の廣狭もわからぬ。マルコボロの旅行記によれば十三世紀には未だ雲南地方では貝が流通したさうである、又西藏では十二世紀になつて始めて貝の通用が止まつて銀を用ひたと云ふ。暹羅國に於ては古代より貝を用ひたさうである。續文獻通考に「暹羅在占城極南濱海貿易以三貳子代錢」とある、現今でも邊鄙の地では貝の通用が行はると聞く。

我邦に於ても果して貝子を貨幣として使用したかは甚だ疑はしく、吾々の祖先が此の邦土に來りし前はいざ知らず所謂大和民族として獨立の社會國家を造つた頃は既に介類以外の物品を通貨としたらしい。名こそ「たから貝」と云ふが「かひ」或は「かいつ」「かひつ」なる名稱には何等の經濟觀念が含まれて居らぬ様である。日本釋名に曰く「かハから也下ヲ略ス、いハ家也凡貝ノ類皆からヲ家トス、或ハ曰フかいハ介ノ意ナリ云々」と載せてあるが、牽強の説の如く聞える。

近頃永沼小一郎氏（介類雜誌第一號二號）は「物ヲ賣買スルコトヲ「うり」「かひ」ト云ヘルニ就キテ考フルニ我上古ニ在リテモ亦貝ヲ貨トナシシモノノ如シ、又貨シハかひ出シノ意、借ハかひ入りノ意」と論せられたが、其説明に至つては所謂言葉のたはむれ（*jeu des mots*）に似て眞面目に信じ兼ねる。同氏は詮（かひ）なる訓も貝（かひ）より出でたりと説かれたけれども是れにも確實なる證據はない。

同氏の説によれば子安貝なる名稱は竹取物語にもあるが寶貝なる名は寶曆八年版の怡顏齋介品にも未だ見えぬ。茲に一つの疑問が起る。支那で紫貝一名文具と稱する介は動物學上貝子と同種であるがただ其形が遙に大きく一尺以上もあり、夫木集に「紫の貝よる浦の藤瀉は波のかへるぞ花と見えける」とさへある程光彩煥爛で貴重な種類である。三才圖會に「古人員を以て寶貨と爲す、而して紫貝は最貴し」とあるより推せば寧ろ此紫貝をこそ寶貝と呼ぶべきであらう。然るに此れには「宇万乃久保加比」の別稱が附せられてゐる。して貝譜には久保介と寶貝とを混同してあるのも無理ならぬ。藤川三溪の水産圖解には紫貝と文具を同一物として之を子安貝とも又は「えかき貝」とも稱してゐる。寶貝にあれ馬久保貝にあれ我國に於ては介類を通貨用に供したる證據はない。歴史は勿論口碑にさへ傳つて居らぬ。強ひて之を信せんと欲せば僅に言語に遺留を探索せねばならぬが、先に述べたる「かし」「かり」などの語は未だそのままで受け取り難い。漢字の買、易、替、代の和訓は何れも「かひ

(は、ふ、へ)であるし、交も換も矢張「かひ」である。然るに言語上の關係の有無を推論するに當り單に同音なるの理由のみでは甚だ薄弱である。兎角昔の博言學者には殆ど諧謔に類した言語論を喋する者が多い。彼等の筆法で論ずれば「かひ」の「か」の音は印度「かうり」或は「かーり」に起因するとでも云はん。左程に苦しんで貝を通貨用とせる地域に日本を編入する必要もない。我邦に使用なきとて貝其物の經濟史に於ける重要位地は更に落ちぬ。

寶貝の最も盛に産するマルデーブでは一月に二度づつ之を採集するが、其方法は海中に椰子の葉を投入して貝がそれに附着するのを待つて集むるのである。斯く收穫した貝は一千二百個づつ荷造して印度ベンガル州に送りて米穀と交換する。然らざれば亞非利加及び其他の地方へ送る。右は近頃の事であるが恐らく太古に於ても斯く有つたであらう。只奇態なる事は元産地に接近する印度大陸の西南海岸とセイロン島にて曾て寶貝を錢に使用したことのない一條である。寶貝の流通が時と所によつて變遷する點に就てはシュルツ氏も述べて居る。(Schurz, Entstehung des Geldes) 今日行はれなくも中古若くは太古には行はれてゐた所もあるから寶貝の流通區域は頗る廣かつたに違ひない。ベンガル、暹羅の如きは昔も今も是を用ひてゐる。アラビヤ、ペルシャでは一時補助貨として使用したが今は用ひぬ。カウカサス山間やらトルキスタン高地の古墳中より發掘された寶貝は果して貨幣であつたか單に裝飾品であつたか解らぬが若し裝飾品であつたとしても其需要が一般的であつたなら通貨にな

りさうな事である。歐洲大陸の北方に於ても例へば英吉利獨逸諸國でも昔より寶貝を尊重した形跡がある。然し之は有史前の事に屬して今は歐洲に於ては寶貝は何の價値もない。亞非利加大陸では今も寶貝が流通してゐる。只此大陸の東岸では裝飾の用に當てられ西部では錢に代用せられる。近頃につて西部の輸入が増せば直ぐ價格が下落する、其の代り戦争など有つて土人が隠してもすると直ぐ相場が騰貴する、相場の高き時は場所探れる類似の貝を以て贗物を作る事さへあるのは恰も金銀貨幣の場合に於けると異ならぬ。

右の如く貝幣の流布することは廣いがその價格は金屬に比すれば實に低いものである。太古に於ては其れで差支もなかつたらうけれども今ではその用を爲さぬ。併し價格の低廉なる貝貨も通貨經濟の立脚地より論ずればこそ不便も感ずるなれ、物々交換に比較すれば其の文化に貢獻したことが自ら解るであらう。ナフチガル博士が中央亞非利加探險旅行の際、壹圓の買物に支拂ふに貝を四千個も數へる勞と時の徒費とを惜しんだが、貝錢の行はれぬ所で自分の提供する物件を望む者なく又遇、あれば如何に之を分つかを定むる困難を思へば貝を數ふるの便なるを知るであらう。亞非利加西部のトーゴ海岸では二十年前には貝八十個が我一錢に通用したが、内地のケタ地方では二十個で一錢に當つた。他の地方でも亞非利加では矢張一錢に三十個から百個と云ふ随分開きの多い相場である。如斯低價なる標準の通貨の行はるる理由は云ふ迄も無く金屬の價値が高く即ち物件の價格の廉き故である。二千

年前の支那では「日用有不満一錢」と云うた有様であつたから物價は頗る廉で貝で用が足りた。何も二千年を數へ返す程もない、ただ六七十年前我邦で天保錢一枚がどれ程有效であつたかと想へば驚くに足るまい。二十年前中央亞非利加で鶏卵の價は貝八個、鶏が三十二乃至百六十個で買へた。又此は二百年前の昔ではあるが、時の旅行家の記事によれば醜業婦の一夜の玉代は大枚貝三つであつたと云ふ。ベンガルの相場も時々變つたが一八五四年の頃は一錢に八十個位であつた。暹羅の田舎では今でも一錢に八十五個であると云ふと如何にも煩しき程低く思ふが、數年前迄通用した我邦のビタ錢（壹毛）を思へば驚くこともない。

十七世紀の中頃の旅行記によると印度の東海岸では貝は三十位で一錢に通用した。併し海岸より去つたアグラの附近に行けば一錢に二十位に騰つたといふ。「今雲南邊夷、貨多用貝、呼爲海肥、以爲庄、四庄爲手、四手爲苗、五苗爲索」（正字通）とあるが、然らば庄は何厘或は何錢、索は幾らに當るか甚だ不明である。

何故に寶貝が通貨に供せられたか其理由は簡單なる様であるが我輩には未だ判然せぬ。勿論何物たりとも通貨となるには一般に需要されるものでなくてはならぬ。然らば何故に寶貝が廣く需要されたかと云ふ問題になる。此問題に對する最も明白で最も普通なる答は貝子は裝飾用として貴重視された事である。雲南記に「新安婦人、繞腰以螺蛤、聯穿繫之、謂爲珂珮」とある。此貝を裝飾に用ひ

る民族は現今諸所にある。臺灣の例は後に擧げる。又下掲第二圖に示した二つ孔の物は我輩が比律賓群島で買つた品物である。昔支那でも裝飾用にしたことは事實に照して明かである。（貝よせの記入枚目）

貴とは古文賢であつて白と人と貝との三字に从ふ。白は掬とか持とかに當る故貴とは貝を持つ人の意で、原始時代には富は飾物で其飾物は貝であつたらしい。貝は頸飾の一種である。それより嬰や瓔、纓の文字が起つたのは説明する迄もない。貝の裝飾品たりし事は説文にのみ依らずとも他にも證據がある。三才圖會（介貝部）に寶貝に就き「北人用綴衣及袍帽爲飾髭頭用飾鑑家用研物」と書いてある。又同類に屬する紫貝に就ては「自然不假外飾光彩煥爛故名文具云々」と。今より三千三百年前盤庚は役人共が貝と玉のみに心を勞するを歎じた（書經）。禮記（四十五卷）によれば天子の棺飾の絶頂に齊五采貝を用ひることが載せてある。同じ禮記（四十三卷雜記下）にある有位の人が死んだ時葬式の一部として若干の貝を飯せしむるを讀んだ。貝子の事であらうかと思はれる。如何となれば天子に九個齒の間に插み含める貝は大きな物ではなかつたらう。此貝も何種であるかは斷言出來ぬが、三才圖會寶貝の記の下に「背突而渾以象天之陽腹平而折以象地之陰」杯の語あるを見れば、寶貝は天地の象を現はし有難い貝と思はれてゐたらしい。それとも貝に何か化學的效能がある如く思はれたかも知れぬ。南越志に「潮陽の南小水あり、海濱に注いで曾山を帶し其中文具多し、以て毒を解く可し」

とあるを見れば、正に貝の藥效あるを認めてゐたらしい。頸飾や冠に貝を用ひるは裝飾の目的たることは確であるが、死人の口中に入れる事は何か他に理由があつたらう。此處に於て吾輩は貝の需要の理由は單に裝飾や玩弄物でなく、一種の宗教的性質があつたかと思ふ。或は迷信的と云うても好からう。一體動物に關しては種々の迷信が行はれるものである。獨り貝の類に就いては割合に少い様である。尤龜をも貝の中に入れて考へれば特別、他の介類は活動せぬ故か人が之に宗教的尊敬を拂はぬ。トレス (Torres) 海峽の群島では香螺の類を祭神用に供する例がある様である、(Haddon, Expedition to Torres Straits, Vol. I, p. 270) 併し寶貝の事に就いては何にも聞かぬ。ボルネオの北部の蕃人が首狩をして首を保存するに眼の凹に寶貝を押し込んで恰も眼が半ば開いてゐるやうに見せるのは、何か迷信でも伴つて居るや否や理由は知らぬ。(Roth, The Natives of Sarawak, N. Borneo, Vol. I, p. 149—154) 同じくボルネオの中央にある「バンウ」(一名「キャン」)種族間に用ひられる赤子を背負ふ入れ物(「ハーワート」と稱す)には種々の貝類を附ける。其理由は貝は善神の加護を招き惡魔の厄を除くと信ずる故である。(Nieuwenhuis, Quer durch Borneo, Vol. I, p. 72) 貝に關する支那人の信仰は漢の朱仲の著した「相貝經」に盡してあると思ふから、幸ひ此の文は長くもなく、ありふれた本でもないから左に掲げて置く。黃帝唐堯夏禹三代之貞瑞靈奇之祕寶其有次此者貝盈尺狀如赤電黑雲謂之紫貝素質紅黑謂之朱貝青地綠文謂之綬貝黑文黃蓋謂之霞貝紫愈疾朱明自綬清氣障霞伏蛆蟲雖不能延齡增壽其禦害一也復又下此

者鷹喙蟬背以逐溫去水無奇功貝大者如輪文王得大秦貝徑半尋穆王得其殼懸於銀秦穆公以遺燕電可以明目遠察宜玉宜金南海貝如珠璣或白駁其性寒其味甘永毒浮使人寡無以近婦人黑白各半是也濯貝使人善驚無以親童子黃唇點齒有赤駁是也雖貝使病瘡黑鼻無皮是也嚼貝使胎消勿以示孕婦赤帶通背是也慧貝使人善忘勿以近人赤熾內殼赤絡是也當貝使童子愚女人淫有青唇赤鼻是也碧貝使童子盜背上有縷句唇是也兩則重霽則輕委貝使人志強狂行伏迷鬼狼豹百獸赤中圓是也兩則輕霽則重

我邦に於て寶貝と紫貝とを混同してゐた事は既に述べた。永沼氏は紫貝の別名宇乃久保加比を以て寶貝の古稱なりと説かれる。蓋し「くば」は古へ女陰に對する隱語なる故であると云ふ。よし此事は別の事としても寶貝を子安貝と稱して専ら安産の守なりとの信仰は支那と本邦にのみ限られたものなるかが一問題であつて、我輩は之に類する信仰の他民族間にも流布して居らぬかを確かめたい。世に存在する物にして *fetsch* とされぬものはあるまいが、紫貝や寶貝の如きものは其の異様な形態と其の美麗なる色彩の故を以て早くより蠻人の尊敬を受けずには居らなかつたらう。

右の如く裝飾用に護符的の價値が加はるに至れば何物と雖も廣く需要せらるるに至る。於是乎寶貝が初めは交換の目的物となり延いて交換の媒介となり遂には交換の標準となる。幸に其形も大いさも誠に程好いから一層流通の便を充す様になつた。

流通に供する貝は其自然の状態のまま使用されたか將又何等かの人工を加へられたかは講究に値す

る問題である。自然のままに通用することは諸處に於て行はれた。現に印度の北方の田舎でも左様である。然るに之は云はば金銀の地金のまま通用する如きもので、金銀の様に内容的價値ある物でさへも通貨とするには何等か人工を加へて一層流通に便ならしむる工夫をする。貝に於ても一般需要に應じ易くするには相當の加工が望ましくなるであらう。此處に於て殊更興味ありと思はることは貨の字の起源である。

貨とは貝の變化したるの謂で、自然のままの介に細工を加へたるを示したるものらしい。貝は天然に光澤があつて美麗であるが、是を裝飾用に供するには多少人工を加へねばならぬ。少くも孔を穿たねば連ぐこと即ち文字に現はるる如く貫くことが出来ぬ。而して吾輩の見たる所では孔を穿つに二様ある。即ち一孔（第一圖）を穿つのと二孔（第二圖）を穿つのとである。前者は第三圖の如く後者は第四圖の如くに絲を貫して繋ぎ裝飾に供する。此の法は今猶諸方の蕃人間に行はれつつある。第一圖の如き一個の孔を有する貝子は二ヶ年前河南彰德府豐樂鎮の附近で採掘された、此地は晉時代の都會であつた。（Ramsden, The Numismatic and Philatelic Journal of Japan, Vol. II, No. 5, p. 163）第二圖は我輩が比律賓にて得たるものである。

第一圖



第二圖



第三圖



第四圖



第五圖



第五圖



孔を穿つは頗る簡単な加工法であるが加工たるや疑ない故之を化けたる貝と做したるものであらうか、それとも今一層念の入つた加工を弄したものかをいふか、念入の化貝法とは即ち貝子の背を削り去つて（第五圖）腹の方を外に向け衣服等に縫ひ付けるのである。

此半製とも稱すべき貝子は數多所々の古墳より採掘された。滿洲の蘆家屯で掘出したものは數個大連の南滿鐵道會社に保存されてある。我輩も二三個手に入れた。又山東の諸所にも見出された。此半製貝子が果して通貨であつたか否かは疑問であるが、裝飾に用ゐられた事は現に今日も臺灣の「バイワン」種族間に行はれてゐる習慣より推しても知られる。彼等は衣服帽或は頸に巻く切れ地に貝子を縫ひつける爲め貝の凸出した背を切つて平たくし貝の腹部を外に顯はす様に貝子の口に絲を縦に入れて結び付ける。自然の光澤善きに満足せずして異種の彩色を貴む故貝子を染めて裝飾に供することは實例多からざるも折々あると云ふ。又古墳より掘出したものの中にも色付け貝子があるを見れば染色も貝子變化の一法なりしならんと思ふ。右の陳述より推測するに貝子を裝飾に使用し延いて貝を貨とする方法は四つあると思ふ。

- 1 一孔を穿つこと。
- 2 二孔を穿つこと。
- 3 背を平たく切ること。

4 色を以て染むること。

是等の法は種族の風俗によりて異なる筈であるが未だ判然した調査も聞かぬ。今日諸所に採掘される物は右の四法の一つに従ふものである。

斯かる有様で貝錢が海邊より漸々大陸の内にも流布したが、遠く擴がり長く流通する間には自ら損耗も起り、或は元産地で收穫が少い年が有るか、若くは戦争やら天變地異の發生に基いて數量に變遷を來したことも必ず有つたらう。其結果は貝貨使用社會の經濟に打撃を與へ從て貝貨の缺乏を補ふ爲めに其代用品を造る工夫を運らす。此工夫は自然貝子以外の材料を用ひて貝貨の形に模したのである。二千七百六十六年前周の時代には眞貝が缺乏し通貨不足せるより、南方の楚より輸入したと云ふ。(Lacoperie) 其處で近頃支那の諸處で採掘された骨製貨は此用に供した物でなからうか。支那の古い記事に骨貨の事は殆ど無いから單に推量に止まる次第であるが、河南新安州や山東省滕州で發見された物は同時代の禮式にのみ用ひられた品物なるか、それとも王莽時代の製造に係る物なるか、更に立論す可き根據が無い。然るに誰人でも實物を一見したる者は直ちに思想上貝貨と結び付けて、貨幣沿革の一階段ならんと想ふは無理ならぬ。

骨貨に二種ある。一つは粗製で一つは精製である。前者は表裏兩面とも粗雜で輪畫も角張つて居り、寶貝の所謂齒を模擬した線が長く荒々しい。後者は兩面とも滑かで形狀は大分圓滿である、齒はやや

實物に似て居る。前者は山東省で出され後者は河南に有つた。猶注意す可き點は山東の物は孔が二つあるが、河南のものは只一つである。貝にしても骨にしても二孔穿つて裝飾に供することは、一孔の物に比して技術が大分進んで居つたものであらう。孔の數は進歩の時代を示すものにあらすして、用せる民族の異なるを示すものであるまいか。併し何れの民族にしても骨貨を使用せる者は恐らく金屬の用法を未だ發見せざる者であつたらう。金屬を用ふる事を知るに當つて通貨をば金屬を以て作る事を考へるは至當の事で怪しむに足らぬ。ラクベリー氏曰く「紀元前三百三十八年(戰國時代)眞貝不足のためか通用禁せられた」(Metallic Cowries of Ancient China) と。蓋説文にある「至秦廢貝行錢」の一句に基ける説であらう。

管子の説に依れば既に禹の時代(今より四千年前)洪水の爲め人民が困窮した時、幣を鑄して人を救つたとある。又三千六百年前早魃があつた際湯は莊山の金を以て幣を鑄て民を救済したとある。されば金屬を以て通貨を作つた事は早くより行はれたが、其頃でも猶金屬以外に珠玉や刀布が貨幣として併存して居つた。併し寶貝も通用したかどうかは解らぬ。所謂珠玉の中には寶貝も含まれてゐたかどうか、又其頃鑄造された幣の形は何に依つたか我輩は知らぬ。近頃羅振玉氏の論文に左の説が載せてある。

吾友蔣伯斧諸議黼近撰化幣史予以前說告伯斧深謂然且引許汝長說解字貝字注云古者化貝而寶龜周而

有泉至秦廢貝行錢是明云周始有泉足爲君說註脚吾說得許君說爲左證差可自信矣貝爲海介虫古代開化在西北距海遠貝甚難得故以爲寶然爲難得故或以他物其狀福山王文敏公家藏骨製之物與傳世之蟻鼻錢同予定爲貝並足銅製之蟻鼻錢爲古銅貝已載之唐風樓金石跋尾並記貝之文字三種然除予所舉作金作魯作𠄎者外尙有作𠄎者乃𠄎字也合金魯𠄎諸字觀之與周貨幣之文字同則銅貝亦周物也周以前所行之貝在最初時必用眞貝非易朽之物何以未見出土者豈以無文字故出土時施毀于春錫之下不得寓於士大夫之目耶抑貝因充貿易之補助當時所用至稀故罕見耶願海內方聞之士一考究之

扱て羅氏の文中に見ゆる銅製の貝とは多分世間に行はれる所謂蟻鼻錢ならんとは兎角人の考へ易き事である。羅氏も斯く信じたる如くラクベリー氏も (Lane-Poole, Coins and Medals, 1885) 左様信じた様である。濱田氏も同説に傾かれて居らるる。(東洋學報第二卷第二號二六六頁)

然るに此説に全く反對なるはラムズデン氏である、氏は一考古學雜誌第二卷第十號(骨貝と蟻鼻錢との間に沿革上何の關係もないと論じた。又曾て支那國初期無銘交換貨幣なる小冊 (Chinese Early Barter and Uninscribed Money, Yokohama, 1912) を著してラクベリー氏の説を否定した。

我輩も曾て銅貝なる文字を諸書にて散見はしたけれども、是を直に蟻鼻錢なりと斷言する事は躊躇して居た。然しラムズデン氏の如く兩者間全く關係なしと斷言する事をも躊躇した。故に此論文を草するに當り同氏を横濱の寓居に訪問して、氏の説を敲いた處が、氏は最近の發見に鑑みて考古學雜誌

に發表せる説を修正した旨を述べられた。氏が其説を變じたる理由は本年(大正三年)一月刊行の大日本古錢雜誌にはのめかされて居る如く、氏は骨貝と蟻鼻錢との間を連結する貨幣を發見したからである。して此の Missing link こそ實に我輩の長らく疑問とせる所謂銅貝ならんと思へば茲に紹介するの勞を喜ぶ。何れ同氏は自己の説を近々發表さるであらうが、我輩は我輩だけの所信を述べよう。骨貝は今日迄二百個近く採掘されたなれども、銅貝は僅に十八個丈知られて居ると云ふ。銅貝の形狀も大きさも骨製の物と異ならない。一面は凸形で一面は凹形で、長さは八分幅は廣い所で五分であつて、銅肉頗る薄い爲め少しく荒く取扱へば直ぐ破れる。地金は銅であれども大分酸化して骨董家の喜ぶ色に揚つて居る。十八個の内金箔した物が二個あつたさうである。銅貝の骨貝に異なる點は第五圖の如く背を切り除いた自然の寶貝を臺にして鑄たかとも思はるる程其に酷似して居る事である。故に孔はないが貝の口は表裏共一直線に成つて居る。銅貝は河南省彰德府管内の豐樂鎮に發見せられた。我輩は此銅貝こそ實に骨貝と蟻鼻錢との連鎖とも稱す可きなれと思つたが、近時ラムズデンは銅貝と蟻鼻錢との間を繋ぐ一種の變形の貨幣を見出した。是れは即ち銅錢では有るが厚味のある凸形の物で、縦孔なく上部に孔を有してゐる。此の銅貝は蟻鼻錢に最も近い物である故同氏の説の起るも一應甚だ至當である。蟻鼻錢なる名稱は其形が蟻の鼻に似てゐる故なりと云ふが、一説には古の埋葬の禮として鎮蛩と云ふ一種の甲蟲を死者の四方に埋むるより此名が起つたとも云ふ。右の外鬼頭、鬼面、

鬼臉等の稱呼がある。是等名稱の理由は此の錢の面が鬼顔に似たるに有りと云ふが、聊か鬼の顔はどんなものかが審かでない。此名稱は或は迷信から起つた物かも知れぬ。

蟻鼻錢とは稱するものの、果して通貨なりしや否やも實は詳に記載が無い。面上の文字の如きは誰も明かに讀む者はない。古泉匯には蟻鼻錢に七種ありと記して居るが矢張文字が讀めぬと見えて臆測に止めてある。文字に依りて區別する方法は二種ある。一種の文字は半兩と想像よみする法である。一種は六銖と讀む法である。よし蟻鼻錢が通貨であつたとしても其形狀が寶貝より連綿として傳はり來つたと斷言は出來ぬ。又今迄探掘した骨製若くは銅製貝の如きも果して錢として流通せるものなるや身邊の裝飾に止まつたものなるやも未決問題である。我輩は今茲に何の定説をも下す能はざるを遺憾とする。此文は單に從來一般に知られなかつたもので貨幣沿革上 Missing link と稱し得可き新發掘を紹介するに過ぎないのである。

出版會承認 い100517號
2000部

昭和十八年七月五日印
昭和十八年七月十五日第一刷發行

新書戸博士國民政策論叢書及論文集

定價 五圓
特別行爲税 拾八錢
相當額 拾八錢
合計 五圓拾八錢

編者 矢内原忠雄

發行者 岩波茂雄

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(四)一八七番(日)
振替口座東京二六二四〇番
會員券號一〇二〇三七號

本製澤長 (一四東東) 刷印社精

小店の物販に於ては責任を度く存す
か。丁・等丁の場合は直接店へ申出で下さい

配給元 東京市神田區
高路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

960
52

終